

2012年 復活節第三主日

ルカ 24:35-48

2012/04/22

イエズス会助祭 小暮康久

今日の福音では、エマオでの出来事の直後のことが描かれています。エマオの物語では復活したイエス様は二人の弟子に現れます。しかし、今日の福音では、その二人の弟子が急ぎ戻ったエルサレムで「11人とその仲間たち」が集まっているその場所に現れます。エマオの物語に続く今日の物語には果たしてどんな意味があるのでしょうか。それは、今日の物語が置かれている位置に関係があるようです。

実は、ルカ福音書の最後の章となるこの24章をよく読むと、三つの復活物語が、一日の出来事として美しくつながって語られていることに気づきます。

一つ目は、週の初めの日の明け方早くに、婦人たちが空の墓を見つけ、そこで天使たちにイエス様の復活を告げられるという物語、いわゆる「空の墓の物語」です。

二つ目は、ちょうどその同じ日の夕方、エルサレムからエマオへの道すがら、その早朝の出来事を論じ合っている二人の弟子にイエス様が現れ、同行します。二人の弟子は、始めはそれがイエス様だと分かりませんが、食卓でイエス様がパンを割いて渡した時に、「二人の目が開き」イエス様だと分かったというエマオの物語です。

そして三つ目が、今日の「11人とその仲間たち」に復活したイエス様が現れたという物語です。エルサレムからエマオまでは60スタディオンの距離と書かれていますが、これは現在の距離にしたらおよそ11kmだそうです。その道すがら、急ぎエルサレムに引き返したのですから、三つ目の物語は、このエマオの出来事から2~3時間後の出来事ということになるでしょう。

つまり、この三つの復活物語は、早朝、夕方、晩という一日の中で、弟子たちがどのようにイエス様の復活を体験していったのかというその「変化」を描いていることとなります。それは言い換えれば、イエス様の復活という出来事についての弟子たちの理解の変化、つまり理解の「深まり」を描いているとも言えます。ですから、三つの復活物語の最後に置かれた今日の物語には、イエス様の復活についての「最も深いメッセージ」が語られていることとなります。それは私たちキリスト者の信仰の核となるメッセージでもあるはずですが、それでは「復活についての最も深いメッセージ」とは何なのでしょう。

そのことを味わうために、今日は二つの箇所注目してみたいと思います。

一つ目の箇所は、『こういうことを話していると、イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。』（24:36）という箇所です。

イエス様は私たちの真ん中に立って下さっているということです。真ん中に立つということは、片時も離れることがないということ、いつも一緒にいてくださるということです。

そしてその弟子たちに向けた第一声が「あなたがたに平和があるように」という言葉だということです。ゲッセマネの園で恐れあまりイエス様を見捨てて逃げ出した弟子たち、あれほど愛してついて行くと言っていたにも関わらず、「わたしはあの人を知らない」と三度もイエス様を捨てたペトロ、十字架上でイエス様が殺されるのを、ただただ恐ろしく遠くから群衆に紛れて見つめることしかできなかった弟子たち、その弟子たちの心は、後悔、自己嫌悪、恐れ、不安といった気持でいっぱいだったと思います。復活したイエス様が「11人とその仲間たち」の真ん中に立った時、「なぜ、私を捨てたのか」というイエス様からの非難の言葉が弟子たちの頭をよぎったかもしれません。そんな恐れと惨めさでいっぱいの思いで見つめる弟子たちに向かってイエス様は優しく「あなたがたに平和があるように」とその最初の声をかけます。「あなたがたに平和があるように」…

この「平和」という言葉ですが、旧約聖書の中のヘブライ語では「シャローム」という言葉にあたります。旧約聖書の世界でも「あなたに シャローム」（サムエル上 25:6）のように、一般的な挨拶の意味合いで用いられる場合もありますが、この「シャローム」の元来の意味は「完全に欠けることなく充足した状態」というような意味です。旧約聖書でこの「シャローム」がどのように使われているかを見てみると、人間は神の与えた「シャローム」を「見る」、「味わう」ことは出来ても、人間が「シャローム」を「与える」ことはできない、「シャローム」を与えることができるのはただ神だけであることがわかります。ですから、ここで復活したイエス様が弟子たちに与えようとされる「平和」も、決して人間が与えることが出来るような不完全な平和ではなく、「神によって与えられる完全な、真に満たされた平和」という性質のものだということがわかります。

それでは、このような「平和」に私たちが満たされるために必要なこととは何なのでしょう。もちろんそれが私たちの信仰と切り離すことができないものであるということは分かります。

これを考える時、一つのヒントをアブラハム物語の中に見つけることができ

と思います。創世記の 15:6 には『アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。』という箇所があります。この箇所はアブラハムの信仰が「主から義と認められる」本物の信仰へと決定的に転換する場面を描いているのですが、ここで「アブラムは主を信じた」と訳されている箇所の元々のヘブライ語は「自分自身を確かにする／主の中で」というような意味なのです。つまり、本物の信仰とは、「主の中で自分自身を確かにする」ということにほかならないということです。他の外的な様々なもの、例えばお金や健康や名誉などを頼りにしながら自分自身を確かにしようとする時、それらを手にしているうちは、喜んだり平和を感じたりするでしょうが、それらを失った時には、その平和は脆く崩れ去ります。「主の中で自分自身を確かにする」信仰だけが、「神によって与えられる完全な、真に満たされた平和」をもたらすということです。

イエス様は私たちと片時も離れることがないように真ん中に立っておられます。そのイエス様に向き合い、ただイエス様との関わりにおいて、イエス様との親しさにおいて自分自身を確かにしようと生きていく時、イエス様の「平和」が私たちを包み込むのだと思います。これはどんなものによっても崩されることのない神が与える完全な平和です。これが一つ目のメッセージです。

二つ目の箇所は、『 次のように書いてある。「メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる」と。エルサレムから始めて、あなたがたはこれらのことの証人となる。』(24:47-48) という箇所です。

イエス様は弟子たちに向かって「エルサレムから始めて、あなたがたはこれらのことの証人となる。」とその使命を告げられます。先に見た 24 章の三つの復活物語のこの最後の物語で、初めて「キリストの復活の証人」としての使命が語られるのです。

今日の第一朗読でも、ペトロは、『神はこの方を死者の中から復活させてくださいました。わたしたちは、このことの証人です。』(使徒言行録 3:15) とはっきりとこの使命を語っています。この弟子たちに与えられた使命は、また私たちキリスト者一人ひとりにとっての使命でもあります。復活物語の最も深いメッセージの一つがこの「派遣」であるということは、これが私たちキリスト者の復活信仰の本質でもあることを示しています。これが二つ目のメッセージです。

今日、注目した二つの箇所では、1) イエス様が私たちに「イエス様の平和」を与えて下さるということ。それはこの世の外的なものが与える「平和」とは

違うということ。そして2) 私たちも弟子たちのように「キリストの復活の証人」としての使命をもって派遣されるということ。この二つのメッセージが語られていました。

この二つの「復活についての最も深いメッセージ」ですが、実はそれらは、ミサの最後、司祭による派遣の祝福の後の「閉祭のあいさつ」の言葉の中に集約されています。「感謝の祭儀を終わります。行きましょう、主の平和のうちに。」という言葉です。

「行きましょう」とはどこへ行くのでしょうか。それは、単に「祭儀」という非日常から私たちの日常に戻っていくという意味ではありません。「キリストの復活」を証しに行くということです。弟子たちのようにこの使命をもって。

そして、その使命は、単に私たちの人間的な力によって果たすものではなく、「主の平和のうちに」果たすものだということです。つまり「主との親しさのうちに、主と共に」果たしていく使命だということです。「行きましょう、主の平和のうちに。」というこの二つのメッセージは決して切り離すことができないということです。

高円寺教会にはこの使命への熱意、宣教の熱意が熱く生きついているのを感じます。高円寺教会共同体が、ますます、主の平和のうちに「キリストの復活」を証しに行くことができますように、その恵みをこの御ミサの中で共に祈ってまいりましょう。